地球ミュージアム紀行

探究と包摂のための博物館
——国立台湾歴史博物館

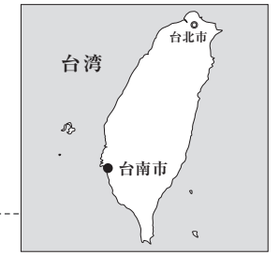
博物館に展示されているものは、過去の遺物ではない。未来を見据えたうえで、展示をどのようにとらえ、どのように活用していくのかを、来館者とともに考え、つくりあげていく「場」としての博物館が必要とされている。

野林厚志（のばやしあつし）
民博 研究戦略センター

経験と共有の場として

ここ数年、日本の博物館をとりまく状況が厳しい。経済状況や政治情勢に翻弄される博物館の姿を目の当たりにし、人びとは博物館に何を求め、それらは人びとに何を提供できるかが改めて問われていることを痛感する。そんな問いにヒントを与えてくれそうな博物館がある。台湾の古都台南に一昨年一〇月に開館し、一年間で一〇〇万人をこえる来館者を迎えた国立台湾歴史博物館（台史博）である。

建物正面の太陽電池パネルで作られた巨大な看板が来館者の視線を奪い、館内では四階までの吹き抜け構造の展示場に圧倒される。来館者はどこからでも博物館全体を見渡せ、過去から現代、現代から過去の視点をつねに意識させる展示場のプランは計算しつくされた感がある。常設展示の締めくくりは子どもたちのメッセージ映像である。将来の自分の夢、未来の世界へ向けた希望を自分たちのことばで来館者に伝えてくれる。博物館が、何かに気づき、ものを考え、その経験を多様な人びとのあいだで共有していくことを促す探究と包摂の空間であるならば、その目的や展示の形態、アウトリーチ活動もまた多様であってよい。多様な博物館の存在が許容された地域で育まれた子どもたちは、探究心旺盛で他者を理解する能力に長けた世代として、その地域の将来を支えてくれるにちがいない。そんな予感を台史博の子どもたちのメッセージは感じさせてくれる。



「われわれ」の歴史を知る

台史博の呂理政館長は長らく博物館学の最前線で活躍し、日本の博物館もあまねく訪ね歩いてきた。そんな呂館長に、入場者数のことも含め博物館の成功を讃えたところ、来館者が多い博物館がよい博物館とは限らないという意外な返事がかえってきた。博物館はそれぞれの目的をもち、その館に適した来館者数や見学の方法があるというのだ。開館初年の入場無料の措置も手伝い、台史博は来館者数を順調に伸ばしてきたが、それ以上に、台湾の人びとが自分たちの歴史に飢えていたという社会的な背景が人びとの足を博物館に向けさせていると感じた。二次大戦後の国民党施政下、台湾の歴史は中国史の一部であり、中国の歴史が台湾の歴史であるという教育が施されてきた。それが、民主化促進や政権交代という社会の劇的変化を経験し、あらためて台湾の歴史を深く知りたい、台湾とはいったい何かを知りたいという探究心が人びとのなかで膨らんでいったことは想像にたやすい。

うれしい悲鳴と、託された未来

ところで、呂館長の目下の悩みは、来館者からの寄贈資料が増え、登録作業が追いつかないことであった。来館者は、自分たちが台湾の歴史を作ってきたということに気づき、歴史を物語る自らの資料を博物館に託し始めている。多様な人びとが集い、それぞれの歴史を共有し、伝えていく台湾の人びとの着場として博物館が息づいている。それは将来に向かって歴史を作っていこうとする台湾の人びとの着実な歩みであり、心意気のあらわれでもある。さらに見逃せないのが、資料の提供者に無償で進呈される博物館資料の保存読本である。彼らの資料が博物館でいかに大切に扱われるかを伝えることが的として作られ、これを見れば、この博物館なら自分たちの資料を安心して託せ、自分も博物館をつくりあげる一員となれることが実感できるだろう。博物館がフォーラムとして機能するためには大切にしなければいけないのは、何であり、誰なのかを台史博は日常的な実践のなかで自然に示しているのである。

そんな台史博で三月の中旬に、特別展「看見平埔（カンケンヘイホ）」（邦訳・平埔を見つめる）が開幕した。平埔とは本来は平地を意味する。この展示会は平地に住んできた先住民である平埔族の歴史と文化をテーマにしている。平埔族の人びとは、清朝時代から中華民国施政下にいたるまで漢族と同様に扱われ、文化や福祉の面で優遇措置が施される原住民族の人びととは社会的に一線を画してきた。そうした状況のもとで彼らは今、歴史に刻まれた自分たちの祖先の姿をてがかりに、エスニシティの再構築を試み、それを社会のなかで認めてもらうための社会運動を展開している。平埔族の歴史が台湾の歴史の一翼を担っていることを紹介する展示会は、民博の国際連携展示として九月に本館展示場でも開催する予定である。目下、日本の来館者の皆さんにむけた展示プランを練っている最中である。

国際連携展示「看見平埔」の開幕式で挨拶をする民博 朝倉敏夫教授

「看見平埔」展で出品された民博の資料の搬入の様子。台史博の多くの館員がかかわっている

寄贈者に無料で進呈される保存読本

媽祖（まそ）巡行を再現したジオラマ展示と呂理政館長（右）。左は本人がモデルになった人形

台史博常設展示場。広々とした空間も魅力のひとつである